

持続的な国際連携関係構築のためにー香川大学と

サボア・モンブラン大学との協定関係

植村 友香子¹、徳田 雅明¹、今井 慈郎²、水野 康一³

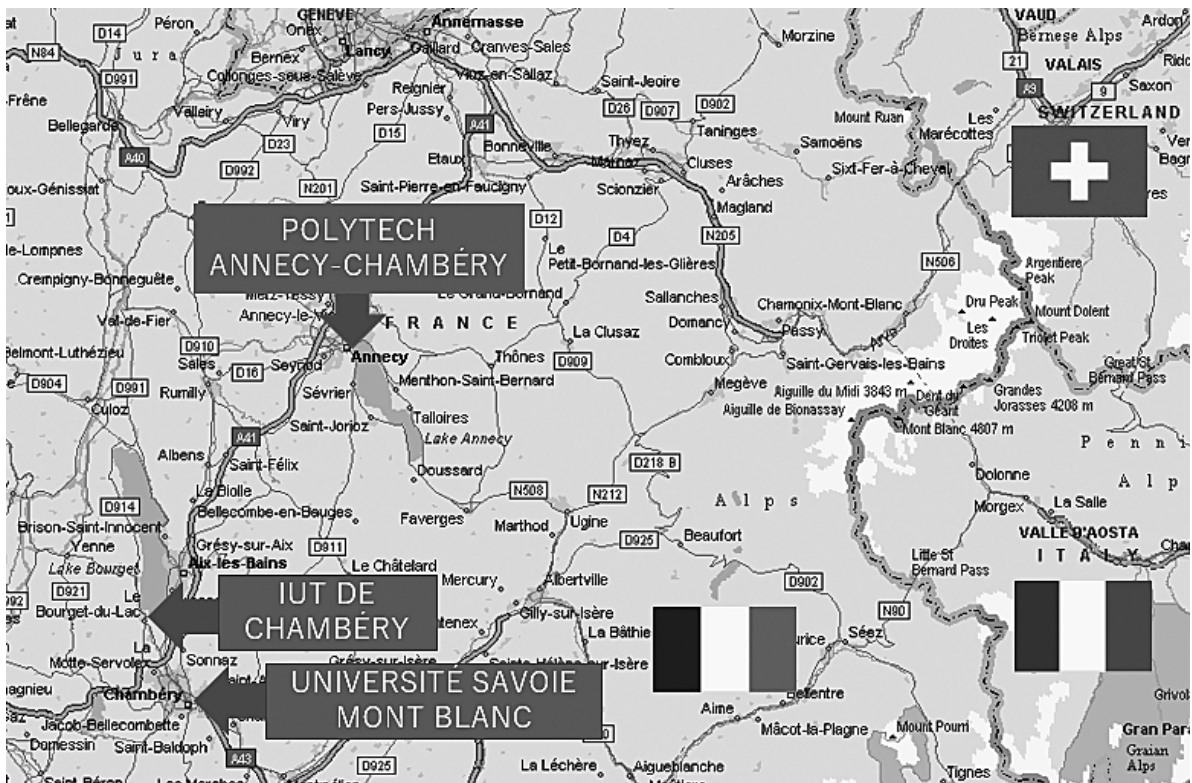
¹香川大学インターナショナルオフィス、²香川大学創造工学部、³香川大学経済学部

For Building and Maintaining Sustainable International Partnership among
Universities – Cooperation through Student and Staff Mobility
with Université Savoie Mont Blanc

Yukako UEMURA, Masaaki TOKUDA, Yoshiro IMAI, Koichi MIZUNO

交流拠点校としての10年の歩み：交流の伸展とその後の停滞

サボア・モンブラン大学 (Université Savoie Mont Blanc、以下USMB) はフランス東部サボア県にありシャンペリとアヌシーの二つの都市に三つのキャンパスをもつ。2015年に、サボア大学 (Université de Savoie) からサボア・モンブラン大学に改称し現在の体制になった。大学本部のあるシャンペリはイタリア・スイスとのいわば交差点に位置することから、大学は地域発展の中核を担っている。5年制のエンジニア教育課程のポリテック・アヌシー・シャンペリ (Polytech Annecy-Chambery以下ポリテック) や学部課程のみのInstitute Université Technologie Chambery (以下IUT)、博士課程までもつビジネススクールなどのいわば連合大学として、在籍学生数約15000人、学位の種類は学士から博士まで約200種、研究所19組織を擁する総合大学である。



香川大学（以下香大）工学部は、2000年にUSMB（当時はサボア大学）のポリテックと国際インターンシップ協定を締結、以来毎年2、3名を継続的に相互に派遣してきた。この協定は、工学部の秦清治教授が「感性情報処理の応用」に関する共同研究をポリテックのPhilippe Bolon教授と行っていたことが契機となって締結に至った。また、2000年、2001年には、澤田秀之助教授（当時）が各1ヶ月程度ポリテックに滞在して「生産における新しいヒューマンインターフェース技術」に関する共同研究を実施するなど、活発な研究交流もあって、2008年9月に香大が実施した協定校訪問では、17名の学生がポリテックを訪問した。2012年に秦教授が退官後は澤田教授がポリテック担当となり、共同研究が継続的に実施された。

香大インターナショナルオフィスでは特定の交流協定締結校等との密接な関係のもと、教育交流あるいは研究交流を複数の部局にわたり重点的かつ積極的に推進するため、2007年に「海外教育研究交流拠点」を設置しチェンマイ大学（タイ）を指定したが、2009年に医学部から提案のあったブルネイ・ダルサラーム大学（ブルネイ）とともに、工学部から推薦されたサボア大学（当時）を指定した。

これを受けてサボア大学との交流は全学レベルへの展開を行うこととなり、香大の国際的な学術・交流の重点分野・テーマのひとつとして工学部提案の「人間支援・バイオメディカル分野における先端的メカトロニクス研究の国際展開」が採択された。サボア大学からは教員が香大を訪れ、工学部のみならず医学部も訪れてK-MIXなどの情報系やAutopsy Imagingなどの共同研究について議論が行われた。

2015年に澤田教授は早稲田大学へ異動する。以後、石井明教授がポリテック担当としてインターンシップ留学生の受入れは継続している。しかし残念ながら新しい共同研究は生まれなかった。USMBは香大の教育研究拠点校であり、複数学部にわたる幅広い交流活動が求められるが、医学部の交流も進まず、工学部単独の交流状況が続き、USMBの拠点校としての地位継続に疑問の声すら上がるようになった。

ここで工学部における、フランスの協定校との国際インターンシップの状況を見ておきたい。2012年以前は、香大からの派遣学生は、フランス企業や公的機関（市役所など）に受け入れられ、またフランスからの留学生も香川県内企業（タダノ、レグザムなど）に受け入れてもらっていた。しかし、2013年ごろからはそのような受入が双方とも難しくなり、現在は、フランスからの留学生も学内研究室での受入にとどまっている。一方、石井教授が指導教員として受け入れた学生（リモージュ大学）は、インターンシップ中に訪れた新潟の会社にそのまま採用となった。最近でもESIEE Paris（École Supérieure d'Ingénieurs en Électrotechnique et Électronique）からの留学生の一人が日本企業での就職を希望し、斡旋を打診してきた。（その後、実際に日本企業で活躍している。）このように、国際インターンシップによる留学制度自体は留学生の日本での就労に結びつく結果を生んでいると言える。しかし、担当者の世代交代への対応も必要となるなど、後任の選定と今後の発展をどのように行うかの課題がある。

工学部（創造工学部）の学部生からは交換留学の相談が多いが、カリキュラム的に自由科目の選択が少ないため、単位互換が難しく、休暇中に短期留学をする方法を提案するしか選択肢のないのが実情である。国際インターンシップに参加したケースもあるが、専門性がまだ低い学部生の受入先を探すのは難航する。もし、先方に、日本人学生が休暇中に参加できる「短期受入れプログラム」制度などがあれば派遣の可能性が広がるであろう。このような議論は創造工学部の運営会議や国際交流委員会でも行われており、シラバスを検討する必要の指摘もあると聞き及んでいる。

工学部とインターナショナルオフィスの協働：災い転じて？

上記のような、工学部主体の交流関係に変化が訪れたのは2017年であった。以下に少々煩雑にはなるが、その詳細を記し、そこから国際交流を発展的に継続させるための要素を抽出していきたい。それらは国際交流活動に関わる立場に立つにあたって意識しておくべきことではないかと思われる。

継続的な関係構築のためには、教職員の異動によって担当者が代わっても、それまでの交流の記憶が継承されることが不可欠である。特に国際関係においては、関係をつなぐことよりもつながないことは、はるかに容易である。したがって、「少々煩雑」であっても、折々に交流活動の詳細を記録として残しておくことは必要である。そういう観点からまずは以下に2017年から2019年までの経緯を記すこととする。

変化のきっかけは2017年11月だったが、その前年の2016年6月に、USMBのThierry Villemin 副学長、Isabelle Villemin 副学長夫人、Philippe Bolon ポリテク副学部長（国際交流担当）、Emilie Viret-Thasiniphone インターナショナルオフィス長による、本学徳田雅明インターナショナルオフィス長の表敬訪問があった。



そこにおいてThierry Villemin 副学長からは、当時の工学部との交流に加えて、全学的に交流を広げていきたい、また、その手段として、研究者間の交流からテーマを決めたイベントへの参加まで、様々な交流の可能性についての提案があった。

2017年にはポリテックから4名の国際インターンシップ受入希望が届き、安全システム建設工学専攻で受け入れた。ただこの時には、それまで香大側で国際インターンシップを担当していた職員が異動したこともあって、情報共有が行き届いておらず、学生たちの履修希望と香大側の理解とに齟齬があり、その調整を学生の渡日後に行うという状況があった。実はその中で、工学部の学務担当職員とインターナショナルオフィス教員が密に連絡を取り合う必要性が生じた。例えば、この4名の学生たちは、工学部の国際インターンシップの枠組みにこだわらずに、日本語や日本文化についても学びたいという希望を持っていたため、工学部職員がインターナショナルオフィス教員と交渉して、当該科目の履修を可能とした。このようなやり取りを通じて、教職員同士がこまめにコミュニケーションを取っていたことがのちの交流拡大にあたって不可欠な学内連携のための布石にもなったと言える。

打開策の核はERASMUS+：香川大学からUSMB-IUTへの学生派遣

以上のような、USMBポリテックと香大工学部（創造工学部）との間の国際インターンシップによる学生派遣・受入に限定されていた相互交流に転機が訪れたのは2017年の11月である。香大インターナショナルオフィス教員の植村友香子特命講師のもとに、IUT国際担当の Serguei Bezoumov教授からのメールが転送されてきた。そこには以下のように、「エラスムスの助成金を獲得」「香大から学部生1名を英語で実施される4か月のコース（経営学分野）に受け入れ可能」「同時にフランス側の教員派遣の助成金も獲得」「香大の学部生にフランス人との交渉についてワークショップを行いたい」旨が記されていた。

I have good news: we have got an Erasmus funding and can receive one student from

the University of Kagawa in our Business semester in English starting September 2018 for 4 months (undergraduate level, grant circa 850 Euros par month, circa 800 Euros for the air ticket)

I have also got a grant to come on a teaching mobility to your University. I would like to animate an international marketing workshop in English for your undergraduate students “Negotiating with French partners”.

このメールを機に、以下に詳述するように香大とUSMBの交流が連鎖反動的に活発化する。その核にあったのはERASMUS+（エラスムスプラス）である。

ERASMUS+はERASMUS（European Region Action Scheme for the Mobility of University Students）の拡大版である。ヨーロッパを代表する人文学者の名にちなむERASMUSは、欧州の高等教育機関における多国間連携を促進し、学生および教職員の交流（Mobility）を質・量の両面にわたって向上させることをめざしている。ERASMUS+は対象を欧州圏と欧州域外と間の交流に拡大したものである。この枠組みによる交流助成金は、ヨーロッパの大学（USMB）が申請し、採択されるとその協定校（例えば香大）との交流に充てることになる。香大に在籍している日本人学生は、協定校であるUSMBで3か月から12か月学んで単位を取得することができる。

USMBとの交流活性の端緒となったのは、このBezoumov教授からのオファーに答える形で、香川大学から経済学部生を派遣できたことである。当該学生はすでにネクストプログラムで1年間アメリカに留学していて英語力があり、さらに基礎的なフランス語力もあって、できればIUTでフランス語での授業も履修したいと希望していた。そのような素養と意欲のある学生を派遣できたことは、交流拡大において重要なことであった。留学期間は当初2018年8月から12月までの予定であったが、留学期中にエラスムス助成金が追加で獲得できたという知らせがあり、留学期間を2019年3月まで延長することとなった。

この学生の派遣にあつての香大側での事務手続きにおいてはインターナショナルオフィスの教職員が担当することになり、この過程で創造工学部職員との情報交換が盛んにおこなわれるようになった。一方、それまでポリテックのみとの交流しか行っていなかったため、USMB側の事務担当の在り方が、香大側としてはよくイメージできないという面があった。

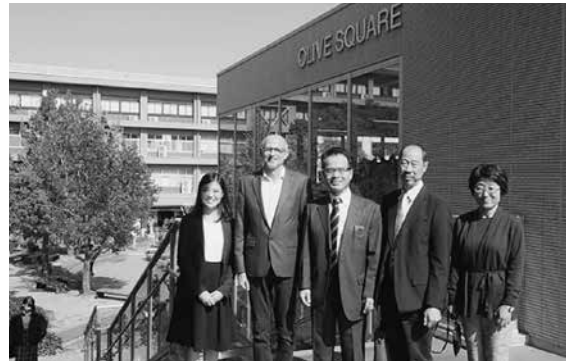
Bezoumov教授の香大訪問による連鎖の始まり

そのような中で、Bezoumov教授から2018年秋に香大を訪問したいとの連絡が入った。当初はポリテックの同僚も一緒にとの話であったが都合がつかず、Bezoumov教授ひとりが10月末に香大を訪問したのである。

この時にはインターナショナルオフィスが、創造工学部の学務担当職員および今井慈郎教授（創造工学部国際交流委員）と連携して受入プログラムを用意するとともに、経済学部の水野教授とも顔を合わして、Bezoumov教授の教員派遣について話し合った。

徳田副学長（インターナショナルオフィス長）の表敬訪問においてはBezoumov教授から、香川大学はUSMBが重視している協定校のひとつで、実質的な相互交流を活発に継続していきたいと考えている、との意思が明確に提示されたのである。また、IUTからマルチメディア専攻の学部生を香大に派遣したいと考えていることが話され、香大側からは半年さぬきプログラムで受け入れ、その後さらに創造工学部で半年受け入れるという案が提案された。

協定関係の停滞という状況に悩みつつ、結果として多くの大学間協定が形骸化する中で、このような試みが以下に述べるような連鎖反応的効果をもたらしたと評価することができる。実を言うと両大学間でも2つの課題があった。1つ目は関係を継続するのか、終息させるのかという問題。2つ目は継続するにしても発展的継続には、より多くの学内組織が有機的連携の相手を増加させ、接続性を強化することが重要であるが、具体的にどうするか、という問題である。



Bezoumov教授は滞在中の1週間の間で、相手側の人脈を探り、人間関係を構築するという基本的な、しかし、国際交流を実質化するにあたっては不可欠のミッションを、持ち前の柔軟性と率直さ、長年の国際担当としての経験にも裏打ちされた社交性を発揮しながら、成し遂げた。そこにおいては「人情の機微」が重要な要素である。



水野教授と植村講師とのミーティングにおいて、Bezoumov教授から「相互交流にはまずお互いに現地を訪ねて実際に人に会い、現場を見ることが何より重要」と、一人分の旅費を提供の申し出があり、業務の関係上出張が不可能な水野教授に代わって植村講師が申し出を受けることとなった。

植村講師は2019年2月に1週間USMBを訪れたのだが、その効果は大きかった。おそらく、USMBの組織構成を把握した香大関係者は植村講師が初めてであろう。そのうえで、香大がUSMBとの関係性を強化するには、ポリテックとIUTを個別に、そして同時に有機的に繋ぎ止める工夫が必要だということが、現地訪問で実感できた。



ポリテックでは、副学部長のAdrien Badel教授とも面談することが叶い、6月に訪日予定とのことであったのでぜひ香川に足を延ばすようにと促した。(実際に7月1日に来日中のBadel教授が香大を訪れ、創造工学部の研究室を見学して、共同研究の可能性について意見交換を行った。) ポリテックで長年、事務を担当しているCatherine Coutazさん、国際インターンシップ学生として4月から香川大学へ派遣予定の2名のポリテック生Hugo Labrosa, Qi Zixuanとも顔を合わせた。

IUTでは、10月から香大に留学予定の女子学生とその指導担当教員とも会った。教員は、日本語の話せない学生を日本に送ることに不安があったようであるが、香大には英語の堪能な教職員がいることを確認出来て安心したとのことであった。

またUSMBインターナショナルオフィス訪問では、2016年に香大を表敬訪問したEmilie Viret-Thasiniphoneオフィス長と率直な意見交換を行った。そこでも「香大はUSMBにとって重要なパートナーだ」という発言があり、日本人学生をより受け入れるための具体的な案についての話も出た。

ERASMUS+によるTeaching Mobility (USMBから香川大学へ)

植村講師の訪問の約3か月後、2019年5月にBezoumov教授が再来日する。これはERASMUS+によるTeaching Mobility(教員交流)の枠組みによる、USMBからの派遣であった。具体的には、EUの大学がEU域外の協定校に教員を派遣し、派遣先の大学において4コマ程度の授業を行う、というものである。先の来日の際、経済学部水野教授と打ち合わせを行っていたが、水野教授が経済学部において経営学担当の教授と調整を行い、講義1コマとゼミ2コマをBezoumov教授に担当してもらうこととした。



交流先学部の拡大ということから、農学部との連携を試みる上では、同学部のPeter Lutes准教授の協力が得られた。農学部との交渉において、今井教授が、国際交流委員長としてその交渉力を発揮、研究・教育において国際交流に積極的な同学部の動き(川村理教授他の支援)も素早かった。学部長表敬訪問の場では、学部の国際交流への取り組みの状況がLutes准教授から説明され、率直な議論が展開できた。この雰囲気はBezoumov教授にとっても予想以上であり、大きな手ごたえになったであろう。農学部長深井誠一教授との記念品交換も和やかな雰囲気の内に終始した。



Bezoumov教授の今回の訪問では、地域連携という新しいファクターも加味された。2018年度まで創造工学部で国際インターンシップ担当だった職員が、環境省四国事務所に転職していたのだが、国立公園を観光資源としてインバウンド招致に活かしたいとの意向から、外国人の意見を聞きたいという要望があり、Bezoumov教授に地元の国立公園を訪れてもらってコメントをいただいた。

ERASMUS+によるTraining Mobility (香川大学からUSMBへ)

実はこのBezoumov教授の再来日の前に、別のERASMUS+関連の交流機会が提供されていた。植村講師がUSMBを訪問したその月末に、ポリテックのBadel教授から次のようなメールが創造工学部に送られてきた。

As part of the ERASMUS+ MIC program, we have a small grant left that could allow us to finance a training mobility for one or two staff from your university. It could be teaching or administrative staff but they must be able to speak relatively good French.

教職員に対する研修プログラムへの申込の誘いである。この教職員研修は、フランス語研修をメインに、USMBに対する理解を深め、協定校の教職員同士の交流を促進することを目的としている。ただ創造工学部では学務担当職員の異動が予定されていたこともあって、適任者が見つからない。従来であればそこで途切れていたかもしれないが、今井教授は関係の発展的継続には学内の有機的連携が重要との立場から、インターナショナルオフィスからこのプログラムに教員を派遣することを打診した。徳田副学長も理解を示し、多少のフランス語の心得がある植村講師が適任とのことで、ふたたび植村講師が2019年6月の1週間、USMBを訪れることとなった。

UNIVERSITÉ SAVOIE MONT BLANC						
STAFF WEEK 2019 - Programme*						
JUNE 16	JUNE 17 MONDAY	JUNE 18 TUESDAY	JUNE 19 WEDNESDAY	JUNE 20 THURSDAY	JUNE 21 FRIDAY	JUNE 22 SATURDAY
INDIVIDUAL ARRIVAL IN CHAMBERY NOTE: <i>If you arrive by plane, there are bus shuttles to Chambéry:</i> From Lyon airport (1hour) From Geneva airport (1 hour) <i>If you travel by train, our train station is « Chambéry Challes-Eaux »</i>	9:00-10:30 WELCOME and PRESENTATION 10:30-12:00 VISIT OF CHAMBERY OLD TOWN 12:00-13:30 Lunch** 13:30-17:30 FRENCH COURSES	8:30-12:30 FRENCH COURSES 12:30-13:30 Lunch** 14:00-22:30 EXCURSION TO ANNECY	8:30-12:30 FRENCH COURSES 12:30-13:30 Lunch** 14:30-18:00 EASY HIKE « LA CROIX DU NIVOLET »***	8:30-12:30 FRENCH COURSES 12:30-13:30 Lunch** 14:30-17:30 GETTING TO KNOW UNIVERSITE SAVOIE MONT BLANC	8:30-12:30 FRENCH COURSES 12:30-13:30 Lunch** FREE TIME 18:00 RECEPTION AT CHAMBERY TOWN HALL 19:00 CLOSING DINNER	09:00-18:00 OPTIONAL EXCURSION TO CHAMONIX AIGUILLE DU MIDI*** (+40€)
			DINNER	DINNER**	DINNER**	

* Draft that might be modified **Not included in the registration fees ***Depending on the weather

ERASMUS+によるTraining Mobility (USMBから香川大学へ)

一方、5月に今度はUSMBのインターナショナルオフィスからERASMUS+のTeaching MobilityまたはTraining Mobility (教職員研修) 枠による2名の受入依頼が来た。香大インターナショナルオフィスとしてUSMB側から示された5名の参加候補者リストからCélia Merias (以下セリア)さんとVirginie Colombel (以下ビルジニー)先生の2名を受入れることとし、以下の表1のような研修プログラムを作成した。

Date	AM	PM
Mon. July 8 th	9:30-11:00 Courtesy meeting @ IO Presentation by Célia About MOU	13:00-16:00 Faculty of Agriculture (Dean, Prof. Kawamura, Prof. Lutes)
Tue. July 9 th	Field trip in the Seto Inland Sea National Park/ Yashima (with the staff of Regional Environment Office)	13:00 Prof. Mizuno, Faculty of Economics 14:40 IO (Sanuki Program) Prof. Takamizu, Prof. Shioi @ IO 18:30 Casual Dinner @ Hotel Clement Beer Terrace with IO staff
Wed. July 10 th	10:00 pick up at the hotel (by Prof. Imai) 11:00 Dean Hasegawa and Vice Dean Suenaga (Faculty of Engineering and Design)	12:00 Presentation by Célia @ English Café of Faculty of Engineering and Design 13:15 Lunch meeting 14:45 Company visit 18:00 Sushi restaurant
Thu. July 11 th	10:00 Talk with international students @ Global Café	Visit Ritsurin Garden
Fri. July 12 th	[Field trip in the Seto Inland Sea National Park/ Goshikidai (with the staff of Regional Environment Office)]	13:00 Farewell Lunch (Prof. Tokuda, Prof. Imai, Prof. Mizuno, Prof. Uemura)

表 1

7月8日から12日までの研修プログラムについてビルジニー先生からは以下のような評価をいただいている。

We were extremely well received.

For me, the program was excellent and varied, rich in exchanges with different actors from the University of Kagawa. We were able to discover a very high quality university, which offers high-level education to its students.

In addition, the perfect organization of the program, enabled us to discover the beauty of the region, the excellent Japanese gastronomy, in a studious and friendly ambience.

I can only salute the great quality of the entire KU international relations team who do an admirable job.

今後の展望－研究と教育の新たな進展

2019年9月には徳田副学長と水野教授がUSMBを訪問した。USMBではLaurence Vignollet国際担当副学長と関係発展について懇談した。USMBからは、Laurence Vignollet副学長ほかDepartment of International Affairs（香大のインナショナルオフィスに相当）のDirectorであるEmilie Viret-Thasiniphone氏やMrs. Célia Mérias氏、国際ツーリズム部門においてInternational Programmesの主任をしているFlorence Besson-Reynaud准教授、Bezoumov教授が参加して、2時間にわたり議論を行った。この交流が両大学にとって非常に重要なものとして捉えていることを、確認できたことが最大の収穫であった。学生交流の活性化に関すること、教員・職員の交流を継続すること、共同研究の推進に関することでは、IT-engineering のみならず、ツーリズムや生命科学の分野でも可能性を求

めていくこと、その他にも交流可能な事業を協力して実施することを確認した。その後にChamberyキャンパスから、Le Bourget du Lacキャンパスに移動して、関係者と議論した。また学生の講義を見学することもできた。



翌日、水野教授は別途ChamberyのJacob-Bellecombetteキャンパスにあるビジネススクール (IAE) を訪問し、国際プログラム担当のBesson-Reynaud学生交流の可能性について意見を交換した。話し合いの中で、本学経済学部とIAEの双方に交換留学希望の学生がいることがわかり、帰国後すぐに相互派遣に向けて手続きを始めることになった。また、IAE付属の研究所 (IREGE) でエコツーリズムの研究者とも面会し、今後の本学経済学部との共同研究の可能性についても話し合うことができた。USMBとの交流をさらに新たな部局へと広げるとても有意義な訪問となった。

帰国後にLaurence Vignollet副学長からは次のようなメールをいただいている。

Thanks also for coming to work with us. I am sure that these days will allow our institutions to increase their collaborations. With all the wonderful things you have described to me about Kagawa and its region, I would like to come. Wait and see the next elections! Whatever, we will do our best to support initiatives of colleagues to develop KU-USMB collaborations.

Bezoumov教授の最初の来訪の際、徳田副学長表敬の場で話し合われたIUTからの学生の受入れに

については、2019年10月開始のさぬきプログラム（IOが実施する半年間の受入プログラム）に1名の学生が参加する形で実現した。2020年4月期の同プログラムにはビジネススクール（IAE）の学生が参加予定である。学生交流の面では、USMBのポリテック以外から学生の受入れが始まった。また、香大経済学部の学生が2020年秋にはUSMBに留学する予定で準備を進めている。

協定関係の活性化は始まったばかりである。本稿で論じたように、この活性化はUSMB側の提供によるERASMUS+の恩恵に与かった面が大きい。今後、関係を継続発展させていくためには、香川大学からもリソースを提供し、徳田副学長・水野教授の訪問で話し合われた共同研究の可能性について、実現させていくことが求められている。

よきご縁（セレンディピティ）をつなぐために

「セレンディピティ」は「予期せぬ幸運に巡り合う能力」「何かを探しているときに、目当てのものとは別の価値あるものを意図せず見つける能力や才能」などのように定義されるが、日本的にいうと「よきご縁にめぐまれる能力」とでもなるだろうか。この幸運を呼び込めたことが活性化につながったと思われるが、そのためにいくつかの伏線とその連鎖があった。

○USMBがERASMUS+助成金を香大に配分する判断をしてくれたこと。

この背景には工学部とポリテックとの約20年にわたる交流実績があることは、どれほど強調してもしきれない。USMB側がこの点を高く評価していたからこそ、助成金配分へとつながった。また、2016年の表敬訪問による、相互の協定関係拡大に関する意思確認も作用したかと思われる。

○ERASMUS+助成金を受けて留学できる準備の整っている学生がいたこと。

当該学生は、経済学部の学生で英語プログラムへの参加可能な英語力を持ち、既に1年間のアメリカ留学を経験してそこで経営学に関する授業を履修し、さらにフランスへの留学を志してフランス語の習得にも励んでいた。

その学生はアメリカ留学から帰国直後、経営学分野でのフランスへの留学についてインターナショナルオフィスの派遣担当教員（植村）に相談に来た。ただし、その相談に来た段階では、大学の関与するプログラムを通しての留学機会があったわけではない。しかし、相談に来ていたからこそ、その後、機会が訪れた時に教員を通して繋がることができたのである。自分の夢やビジョンを言語化し、他者に伝えておくことは機会を得るには重要である。

○CEFRのA2レベルのフランス語能力がある教員が香大にいたこと。

2019年6月のフランスでの教職員研修に参加するためには最低限のフランス語能力が必要とされていた。USMB側からの招待に答えるという形で、香大から派遣できたことにより交流の連鎖を断ち切らないですんだ。

○USMBがフランスから香大への教職員派遣にエラスムス助成金を配分してくれたこと。

これには、香大からの学生派遣、USMBからの教員派遣、香大からの教員派遣、USMBからの職員派遣、という交流の連鎖に対するUSMB側の高い評価があったのではないだろうか。

以上のような連鎖を呼び込めたのは、そのご縁をつなぐことを「自分事」と思って務める人たちがいたからである。すなわち、

○徳田インターナショナルオフィス長が、海外教育研究拠点校であるUSMBとの提携の強化を重視していること。

○複数の部局の、複数の教職員間でコミュニケーションが取れる状態だったこと。

今井教授ら創造工学部教員および教務担当職員、ルーツ教授ら農学部教員、水野教授ら経済学部教員、インターナショナルオフィス教職員らが、授業や訪問、派遣・受入プログラムに関わる作業に協力してあたり、実現につなげた。

○USMB側においてはBezoumov教授がコミュニケーションのハブとして機能していたこと。

以上に指摘したことは、必ずしも国際交流活動に限定される要因ではない。逆に言えば国際交流活動は大学における他の活動と同列のものであって、それ以上でもそれ以下でもない。

他の活動との違いとしては、業務遂行に必要な外国語運用力と社交力が必須であることが挙げられる。大学全体のグローバル化を進めるには、国際交流活動を、特定の教職員の特殊な仕事とみなすのではない、教員の自覚と職員の配置が必要なのではないか。セレンディピティをつないでいきたいと思う。

参考文献：

サボア・モンブラン大学

(歴史) <https://www.univ-smb.fr/universite/decouvrir-lusmb/son-histoire/>

(組織) <http://formations.univ-smb.fr/fr/catalogue.html>

「サボア・モンブラン大学（フランス）訪問団がインターナショナルオフィス長を表敬訪問」

<https://www.kagawa-u.ac.jp/kuio/news/18689/20095/>

ERASMUS+

https://ec.europa.eu/programmes/erasmus-plus/about_en

「サボア大学教員がインターナショナルオフィス長を表敬訪問」

<https://www.kagawa-u.ac.jp/kuio/news/20753/22706/>